

## 〔シンポジウム〕

## 家族看護学の現状と展望

## 司会のことば

東京医科歯科大学\*

波多野 梗子

## シンポジウムの目的

杉下学会長講演「家族看護学に期待されるもの」を受けて、実際にどのような分野でどのような家族看護が行われているか、どのような家族看護研究があるか、どのような研究課題があるかを次のシンポジウムで各々の分野で活躍しておられる皆さんに話していただき、それによって学会長講演をより具体的なものとして提示したい。

広くさまざまな分野から話を聞かせていただき、最後に各分野から、これからの家族看護学会に何を望むか、家族看護学会への期待にひとこと触れていただきたい。

## シンポジストの紹介

## 1. 現代日本の家族変動

船橋 恵子 (桜美林大学)

最近「赤ちゃんを生むということ」という著書を出版。社会学、特に産育の比較社会学をご専門とされ、助産婦さんとお仕事をされている。

## 2. 高齢化社会と家族看護学

鈴木 和子 (千葉大学)

千葉大学に平成4年寄付講座としてはじめて「家族看護学」の講座が置かれた。そこで主に保健婦さん方と仕事をされている。

## 3. 母子看護と家族—未熟児の場合

柳沢 恵美 (都立大塚病院)

幅広く臨床看護でお仕事をされているが、現在は都立大塚病院の未熟児病棟で家族看護を実践されている。

## 4. リハビリテーション工学の立場から

志水 康雄 (筑波技術短期大学)

筑波大で聾啞の方々の教育に熱意をかけられておられる。

## 5. 保健福祉政策にみる家族

外口 玉子 (社会福祉法人かがやき会)

政治家として活躍しておられたが、本来専門として精神看護に携わっておられ、その現在である「かがやき会」のお話をうかがいたい。

## シンポジウムの進めかた

十分時間がないので各自15分程度でお話いただき、終了後追加発言のある場合15分とる。指定討論をはぶき、フロアーからご発言をお願いしたい。

\*現) 愛知県立看護大学学長

## まとめのことば

各々の専門の立場から、いろいろな分野での家族あるいは家族看護の生のお話を聞くことができたと思う。前の学会長講演と合わせて、家族看護学とは何か、なんとなくイメージを描くことができたのではないか。子どもの問題であれ、老人の問題であれ、障害者の問題であれ、「家族」「家族看護」ということでは共通している面が多くあり、その共通する事柄を学んだり、研究することは重要だと確信している。

私は家族看護 (Family Nursing) の発祥の地である米国と日本では、同じ家族看護といってもかなり違いがあるのではないかと考えている。米国は個人主義の国であり、それを前提とした家族、家族看護であるのに対し、日本では、長い間個人は家族の中にあって個人は家族に埋没していた。個人と家族の関係は家族のために個人があるといった国柄だった。一つの例として米国においては、親子心中といったことはまったくおこらない。

最近では、日本でも若い人々はだんだん個人主義になってきてはいる (たとえば男女別姓に見られるように)。また、家族形態も変化してきているし、外

口さんが示して下さったように家族についての考え方も徐々には変化してきている。しかし家族の形態や家族の構成の変化と、人間の価値観、考え方の変化は平行してはいない。人間の考え方や態度など心理的側面はかなり遅れて変化すると考えられる。そこで古くからの伝統的な家族観をもった老人 (表面的には若い人の考えに同調しているように見えるが、真に古い考えから抜け出せない) と若い人 (新しい家族観、個人主義的家族観をもつ) の考え方に自ずとギャップが生じると考えられる。私はそこに家族看護における一つの問題点があるのではないかと考えている。すなわち、ケアをするあるいはケアを計画するより若い世代の人と、古い世代のケアされる人との家族についての考え方のちがいが、人間関係への期待、家族看護への考え方が問題となるのではないかと考える。今後は、特に文化的な比較なども重要な課題ではないかと考えている。

家族看護学会の発足にあたり、このシンポジウムが今後の家族看護学の発展のためにいくつかの課題を提供できたのではないかと思う。